台湾におけるイスラーム

後藤武秀

1．はじめに

台湾人の最も多くが信仰している宗教は，儒，道，仏の混融したものであり，寺廟への参詣が日常的な活動となっている。統計上は，仏教徒が21万6千人強であり，道教の信仰者が82万7千人強となっており[1]，両者を合わせても100万人強である。しかしこの数字は，それほどこの社会の実態を反映したものとは考えられない。儒，道，仏の混融した宗教は，台湾人の日常生活に溶け込んでおり，生活上の様々な儀式や祭礼が，その規範やタブーに基づいて展開されているからである。他方，キリスト教も早くより台湾で布教活動を展開しており，カソリックは18万2千人強の信者を有し，プロテスタントは38万2千人強の信者を有している。

これに対し，イスラームは7千8百人強の信者であり，宗教施設と認定されているモスクは，台湾全土で4箇所である[2]。これは国家統計上の数字であり，現在のところ，モスクは6箇所，信者は6万人であるといわれる[3]。信者数こそこのように決して多いものではないが，台湾におけるイスラームの歴史は決して新しいものではなく，台湾人の中国大陸福建省からの渡来とともに始まった。そこで，本稿では，台湾におけるイスラームの歴史を見ながら，今日の状況について概観することとする。

2．台湾におけるムスリムの歴史的変遷

台湾には，清朝時代からムスリムが定住していた。その大部分は泉州人であった。泉州というのは福建省の北部に位置し，南部の漳州とともに台湾人の故郷といわれる地域である。泉州は，唐の時代から商港として栄えており，イスラーム商人が来航し，その影響で泉州人の一部がイスラームに帰依するようになっていた。このような泉州から台湾に渡来した人々は，商業に長けており，台湾で最初に開けた都市である鹿港に居住するようになった。福建省から渡来した多くの台湾人が農業に従事したのとは対照的である。清朝時代には，鹿港と北部の港町である淡水にモスクが建設されたことが知られている。民国47（1958）年には，鹿港には300余戸のムスリム家庭があったようである。

このような台湾開闢以来のイスラームの伝統の上に，民国38（1949）年に国民党政府が中国大陸から台湾に移転してくると，200万人とも言われる中国人（外省人）がこれに伴って台湾に居住し始めるようになり，その中にはムスリムも多数いた。清朝時代から台湾に居住していたムスリムに，これら外省人ムスリムを加えたのが，今日の台湾におけるムスリムの大部分である。

ところで，イスラームは，中華民国が中国大陸にあったときに，大きく二つの組織に分裂していた。その一つは，中国回教協会である。これは，民国26（1937）年，日中戦争のさ中に，白崇禧が南京において「抗敵救国総会回教分会」を結成し，民国31（1942）年に「中国回教協会」と解消したのに始まる。外省人の台湾移住とともに，同協会も台湾に移転した。民国47（1958）年まで白崇禧が理事長を務めた。民国49（1960）年に，台北市内の新生南路にモスクを建設し，同協会はこのモスクに本部を置いた。同協会の活動のうち，台湾にとって最も重要なものは，中東諸国との政治，経済，文化交流に

同協会が大きな役割を果たしたことである。1972年の国連脱退以降，台湾と国交を有する国は漸減しつつあるなかで，中東地域の諸国との外交関係，とくにこの地域からの要人の台湾訪問については，台湾外交部は同協会の助力を得ている。今一つの団体は，中国回教青年会である。本会は，民国38（1949）年に設立された「中国回民青年反共建国大同盟」を出発点とする。当時，中国では共産党と国民党の内紛に決着がつき，毛沢東が中華人民共和国の建国を宣言すると，唯物論の下で宗教弾圧を恐れた人々は中国南部へと避難した。そのような状況の中で，中国東北地方のムスリム青年が広州で設立したのが本会である。彼らは，台湾に移住すると，台北市羅斯福路に台北回教文化清真寺というモスクを建設し，ここを拠点に活動を展開した。そして，民国46（1957）年に「中国回教青年会」と名称を改めた。

以上に見た二つのイスラームの組織は，台湾に移住した当初，決して良好な関係を有していたわけではなく，時には衝突すら見られた。民国60（1971）年，サウジアラビア国王が来台したとき，国民党政府は中国回教協会に接待行事への参加を求め，同協会はこれに応じたが，中国回教青年会はこれに参加することがなかった。さらに，サウジアラビア国王は台湾のムスリムに対し金銭を恵与したが，それはすべて中国回教協会の手にわたり，中国回教青年会にわたることはなかった。このような両派の対立は，歴史的出発点を異にすることにあるだけでなく，台湾における土俗の慣習，すなわち儒，道，仏の混融した宗教的慣習とイスラームとの調和のあり方，換言するならイスラームの台湾化に対する考え方の違いにも原因があった。すなわち，台湾では，香を焚くことが寺廟参拝のときの儀式となっており，香の絶えるときがない。中国回教青年会ではイスラームの儀式の際に香を焚いているが，中国回教協会はそのような儀式は，漢人の宗教観に基づくものであり，詰まるところ，アッラー以外の神を信じることにつながるとして，これを批判した。中国回教青年会は，香を焚くのは宗教心を高めるためであると反論したが，中国回教教会の認めるところとはならなかった。逆に，服装については，中国回教青年会はかなり厳格に伝統的なイスラームの習慣に従っているが，中国回教協会のほうは規制が緩やかである。このような対立はあるものの，台湾においては決して人数の多くないムスリムであることから，その協力を求める声は強く，民国67（1978）年，中国回教青年会は中国回教協会傘下の一単位として，これに組み入れられることとなり，台湾におけるムスリムの統一的団結が実現したのである。

3．ムスリムと台湾社会

儒，道，仏教の混融した伝統的漢人社会の宗教的儀式が街の随所に残る台湾社会において，食生活も，宗教的慣行も異なるムスリムが生活することは決して容易なことではない。そこで次に，ムスリムが台湾社会で生活するうえで困難とされる事柄について見ていこう。

第一に，ムスリムの儀式が台湾社会において決して一般的でないことである。特に，ヒジュラ暦9（ラマダーン）月に宗教的義務として行われる日中の断食は，台湾にはない習慣であり，個人の信仰上の問題とはいえ，その実施の困難が推測される。第二に，食生活に関わる問題である。イスラームでは豚肉の食用が禁止されているが，台湾の主要な食肉は豚肉である。もちろん，イスラームの儀式に従って処理された肉ではない。近年，ムスリム用の食肉を売る店（ハラール食材店）ができてきたが，その数は決して多くなく，台北のような大都会に集中している。従って，地方に居住するムスリムにとって，食生活が大きな問題である。また，それ以上に大きな問題となっているのが，ムスリムの職業との関係である。台湾のムスリムは，公務員，教員，軍人が多いといわれる。特に軍人の場合，食事は軍隊内で供給されるので，完全にイスラームの慣行に従うことは困難なようである。第三に，財政の問題である。台湾がかつて国際社会においてその存在を公認されていたときは，中東諸国とも国交があり，台湾のイスラーム組織は富裕な中東諸国から資金援助を受けて

いた。しかし，1972年に台湾が国連を脱退すると，外交関係を有する国家が漸減し，1980年代に中東紛争が拡大すると中東諸国との外交関係も断絶するようになった。その結果，中東地域からの資金援助は中断している。第四に，布教に関連する問題である。台湾のムスリムは布教活動はほとんど行っておらず，モスクにおける礼拝がその活動の中心である。しかし，近年，布教の重要性が認識されるようになり，南部の高雄にイスラーム宣教師教育組織が結成されるにいたっている。

以上に見たような問題を抱えながらも，台湾のムスリムは少数ではあるものの，団結を維持してきている。

4．台湾におけるイスラームの将来

台湾におけるイスラームは，以上に見てきたように中国人ムスリムを中心として活動を展開し，今日に至っている。しかし，近年，外国人ムスリムが台湾に多く居住するようになってきた。その大部分はインドネシアから台湾に帰化した人々である。台湾では1990年代から安価な労働力の確保を目的として，東南アジアから多数の労働者を受け入れてきた。最も多いのはフィリッピンからの労働者であるが，近年はインドネシアからも多くの労働者が台湾に来ている。周知のようにインドネシアは人口の90パーセントがムスリムであるから，その中には多数のムスリムがいることが推測される。次に，インドネシアから多数の女性が台湾人と結婚する目的で来台し，結婚後台湾に帰化していることである。このような帰化女性は，1993年には３名，1984年には14名であったが，1995年になると184名，1997年には1,999名，そして1998年には3,058名と大幅に増加している。もっとも，最近では2001年に320名であり，代わりにベトナムからの帰化女性が急増している(4)。これらインドネシアからの帰化女性がどのような宗教生活を送っているかは調査されたことがないので明らかではないが，伝統的な台湾の宗教との調和が問題となっていることが予測される。

※本稿は，東洋大学学術推進センター・研究所間プロジェクト研究研究助成金に基づく，研究課題「イスラーム世界における伝統的秩序規範の持続と変容」【拠点：東洋大学アジア文化研究所・現代社会総合研究所，研究代表者：後藤武秀，平成17～19年度】の研究成果の一部である。

＜註＞

(1)『中華民国90年内政統計年報』127頁。
(2)同上。
(3)李世偉主編『台湾宗教閲覧』2002年，214頁以下。
(4)『中華民国90年内政統計年報』96頁。